

1 はじめに

イロカノ語には、英語の空間的直示動詞 *come* と *go* にそれぞれ翻訳される *?ay* (1) と *pan* (2) が存在する。フィリピン諸語においては、タガログ語などこうした直示動詞を持たない言語も存在し、また報告例があっても詳細な意味論的分析はなされていない。

- | | | | |
|-----|-------------------------|---------|--------------------|
| (1) | ? <imm> ay | kanyak | ti gayyem = ko. |
| | <PFV.AV> come | 1SG.OBL | C friend = 1SG.GEN |
| | 「友達が私のところに来た。」 | | |
| | | | |
| (2) | Na-pan | kanyak | ti gayyem = ko. |
| | PFV.AV-go | 1SG.OBL | C friend = 1SG.GEN |
| | 「友達が私のところから離れて行った。」 | | |

本研究の目的は、映像刺激を用いた描写実験から得たデータにより、2つの動詞の意味的性質を分析することにある。それにより、これら2つの直示動詞の分布を理解するには、(a) 従来の分析で用いられてきた話者位置という空間的な概念でなく、「話者領域」という機能的な特徴付けが関わること、また (b) 語彙化された意味と、推論から生じる語用論的な含意を区別する必要があることを示す。加えて、(c) 移動者の有生性によって、2要素の頻度には差が生じるということを報告する。

2 先行研究

■ **意味論・語用論の区別** 意味論的な意味 (semantic meaning) は、記号が慣用的に表す意味を指す。この種の意味は、その記号が埋め込まれる文脈に関わらず生じ、特定の言語集団において安定したものである。

語用論は、慣用化された記号がある文脈において実際に使用された時に、内包に付加される肉付け的な意味 (implicature) がどのようなプロセスで生じるのかを問題とする。含意は文脈依存的であり、話し手と聞き手が共有する言語的あるいは非言語的な知識や、会話における協調性の想定に基づいて「推論」されるものとされる (Grice 1975)。

■ **直示表現の意味** 直示表現は、指示詞や人称体系、COME/GO といった移動を意味するものなど、その最終的な解釈が文脈に依存する表現のことを指す。その一方で、直示表現は「直示的中心」という

* 本発表は科学研究費補助金#15H03206 (代表: 松本曜) からの支援を受けている。

概念を軸に、文脈から独立した安定した意味を持つ。Fillmore (1997[1971]) は英語の直示動詞について、*come* は直示的中心への移動を表し、*go* は非直示的中心への移動（または直示的中心から離れる移動）を表すと分析している。また他の言語においても、直示的中心が聞き手にはシフトしないという違いがあるものの、直示動詞は同様の意味を表すと分析されている (Gathercole 1977)。

■ **話者領域 (HERE-SPACE)** 直示的中心という概念は、典型的に話者や話者位置という概念に置き換えられる。この話者位置という概念は伝統的に空間的な定義付けがなされてきた。しかし、Enfield (2003) はラオ語の指示詞の研究において、これを話者の行為や注意が及ぶ機能的な領域（話者領域）と捉えるべきと主張している。話者領域は話者によって自身の領域と見なされる空間で、人間の相互行為を制限する物理的な障壁などによって定義される (Goffman 1963)。

本研究では、イロカノ語の直示動詞の分析においても、話者領域という概念が必要であることを示す。

3 直示動詞の形態的・統語的特徴

本節では、イロカノ語の直示動詞が動詞形態論的には異なるクラスに属しながらも、統語的には対を成すことを示す。

イロカノ語はオーストロネシア語族西マラヨ・ポリネシア語派に属し、主にフィリピン共和国のルソン島北西部で話される。述語が節の先頭に現れ、典型的には VSO 語順をとる。また、動詞範疇はアスペクト（完了／未完了）と、ヴォイス、動作主性を含む。

イロカノ語の動詞はフォーカスシステムという複雑なヴォイス体系を有する。動詞は形態的に、*-um-/ag-/ma-*（行為者態 (AV)）、*-en*（被動者態 (PV)）、*-an*（場所態 (LV)）、*i-*（移動物態 (CV)）という 4 つの範疇が区別される。以下の表 1 は、直示動詞のヴォイスに関する活用を表す。

表 1 直示動詞とヴォイス

		Voice category			
		AV	PV	LV	CV
root	<i>?ay</i>	<i>?<um>ay</i> ‘to move hither’	n/a	n/a	n/a
	<i>pan</i>	<i>ma-pan</i> ‘to move thither’	n/a	n/a	<i>i-pan</i> ‘to cause to move thither’

?ay には行為者態接辞 *-um-* が付加されるが、*pan* には *ma-* が付加される。また、*pan* は複数のヴォイスにおいて実現できるため、2 要素は異なる形態的特徴を持つと言える。

統語的に *?ay* と *pan* は範列的關係にある。この 2 つの動詞だけが動詞連続構文の前項動詞として実現する。この事実は、イロカノ語話者の言語知識において、*?ay* と *pan* が対を成していることを示唆する。

- (3) ?<um>ay/ma-pan ag-buya iti sine ni Randy.
 <AV>come/ AV-go AV-watch OBL movie P.C Randy
 「ランディは映画を観に来る／行く。」

4 データ

データ収集のため、人やものの移動を含む映像を描写してもらう実験を行った。実験は 2016 年 3 月と 6 月にフィリピン共和国イロコス・ノルテ州ラワグ市において、21–50 歳の話者 9 人（女性 5 人、男性 4 人；年齢平均 34.2 歳）の参加を得て実施した。1 人につき 52 の映像をラップトップコンピュータ (MacBook Air) で提示し、結果 468 描写を得た。なお、直示的中心のシフトを考慮し、話者（被験者）と聞き手（筆者）が隣り合った状態で実験を行った。

5 直示動詞語根?ay と pan の意味と使用

ここからは?ay と pan の意味と使用を観察する。本節では結論として次の事を示す。?ay と pan は異なる度合いの意味的具体性を持つ。pan はより抽象的な要素であり、語彙的レベルにおいては直示的な意味を持たない全般的な移動を表す。一方、?ay は意味的により具体的な要素であり、話者領域への移動を表す。

5.1 ?ay の使用

?ay は図 1 が示すような、階段の上で立っている話者の目の前への移動に使用される。このシーンにおいては、話者がいるのは開かれた場所であり、話者領域を規定するような仕切りは存在しないが、移動者は話者の目の前まで移動したため、やりとりが可能となる話者領域の中に入っていると考えられる。このシーンは (4) のように描写された。



図 1 女性が階段を上って話者の目の前に移動

- (4) M-agmagna ti gayyem = ko nga
 AV-IMPF:walk C friend = 1SG.GEN LIG
 imm-uli iti agdan nga ?<um>ay kanyak iti ngatu
 PFV.AV-ascend OBL stairs LIG <AV>come 1SG.OBL OBL upstairs
 「友達が階段を上がって上の私のところに来た。」

また、umay は、着点の話者のいる位置から外れていても、話者を含む物理的に仕切られた領域への移動であれば使用される (図 2 (a))。こうした状況においても、(4) と同様に (5) のように描写される。このシーンでは移動者が話者に伝えることがあると想定され、そうしたやり取りが可能な話者領域に移

動してくると描写された。

- (5) M-agmagna diay gayyem = ko nga ?<um>ay kanyak
 AV-IMPf:walk C friend = 1SG.GEN LIG <AV>come 1SG.OBL
 nga kasla adda nasken nga i-baga na kanyak
 lig seem EXST need LIG CV-say 3SG.GEN 1SG.OBL
 「私に何か言うことがあるようで、友達が私のところに歩いて来た。」

なお、図 2 (b) のような、話者から外れた開かれた場所への移動であれば、?ay は使用されない。

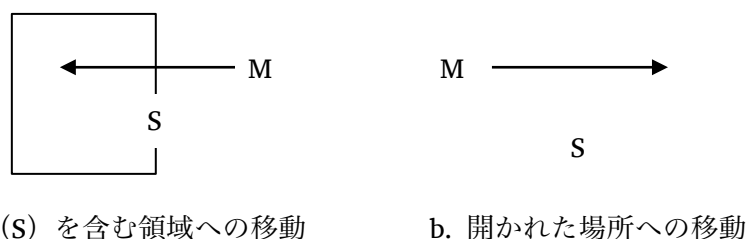


図 2 話者 (S) 位置から外れた移動者 (M) の移動

5.2 pan の使用

pan はほとんどの場合、?ay と対立する意味として解釈され、図 3 が表すような、非話者領域への移動を描写する時に使用される。例えば話者から離れて自転車まで移動する状況は、(6) のように描写される。

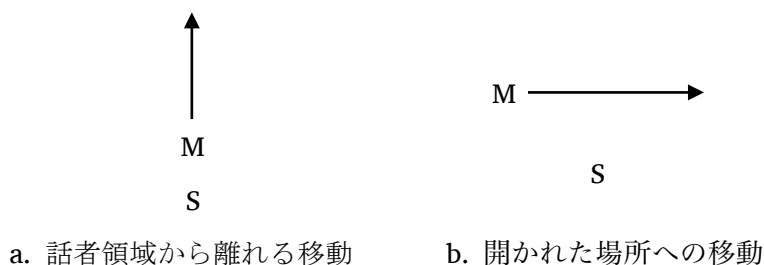


図 3 pan が使用される典型的な状況

- (6) N-ag-tartaray tay barkada = k a na-pan iti bisikleta.
 PFV-AV-run C friend = 1SG.GEN LIG PFV-AV-go OBL bicycle
 「友達が走って自転車のところに行った。」

しかしながら、典型的ではないものの、pan は?ay が使用されるような話者方向への移動を描写する際にも使用できる。次の例 (7) は話者の目の前に移動する事象に使用された描写である。さらに、以下の著者の作例 (8) のように、pan が全般的な移動を表すものとして解釈される場合もある。

- (7) **Na-pan** ti gayyem = ko iti uneg ti balay.
 PFV.AV-go C friend = 1SG.GEN OBL inside C house

「友達が家の中に入った。」

- (8) **Adda** **papan-an** = na. Baka ? <um> ay kanyami.
 EXST go-LOC = 3SG.GEN probably <AV> come 1PL.EX.OBL

「彼はどこかに行くらしい。もしかしたら私たちの所に来るかもしれない。」

これらのデータから、*pan* は語彙意味として非話者領域への移動を表しているのではないことがわかる。非話者領域への移動という意味は、必ずしも表現されない文脈依存的な意味であり、語彙化された意味とは言えない。3 節で述べたように、*?ay* と *pan* は範列的な関係にあり、また、意味的に特殊と抽象という含意スケールを形成する (Levinson 2000)。従って、*pan* は *?ay* が表す「話者領域への移動」という意味を含む。しかしながら、多くの場合に *pan* が非話者領域への移動として解釈されるのは、「*?ay* が使用されない＝話者領域への移動ではない」[†]という推論から生じる含意と考えるのが、これらのデータの分布と、聞き手の解釈を理解する上で妥当であると考えられる。

■ 5 節のまとめ

本節では、*?ay* が意味的により具体的な要素であり、話者領域への移動を表すこと、さらに *pan* が意味的により抽象的な要素であり、全般的な移動を表すことを示した。Fillmore (1997[1971]) などに代表される直示表現の研究では、意味論と語用論が区別されることはほぼないが（他にも Goddard 1997などを参照）、その分析を採用した場合、イロカノ語には意味的な重なりがある *pan*₁（＝全般的な移動）と *pan*₂（＝非話者領域への移動）という2つの形式を想定する必要がある。

また、一般的に直示移動動詞は経路動詞の下位範疇として扱われるが (Talmy 2000)、*?ay* や *pan* は、話者と移動者の空間的な位置関係の変化を厳密に表現するわけではないことが明らかとなった。従って、こうした直示動詞は経路動詞とは別に扱うのが妥当と言える (Matsumoto et al. to appear)。

6 有生性と*?ay*、*pan*の頻度

これまで、話者と他者のやりとりが関わる話者領域という機能的概念が、イロカノ語の*?ay* と *pan* の記述に関わることをみた。特に*?ay* は話者領域への移動を表すため、話者と移動者のやりとりがより強く関わると考えられる。ここから、本研究では次の具体的な仮説を検証した。つまり、やりとりが想起しにくい無生物の移動より、それが想起しやすい有生物の移動の方が*?ay*の使用頻度が上がる、という予測である。事実、*?ay*の使用は人間が移動者の場合が多い。無生物の場合は*?ay*の使用は非常に稀で、フィッシャーの正確確立検定でも有意な結果を得た ($p=0.002739$)。一方、*pan*は無生物でより頻繁に使用された。COME類の使用に有生性に関わるということが明らかになった。

[†] “What isn’t said, isn’t” (Levinson 2000: 31)

表 2 有生性と出現率（括弧内はトークン数）

	<i>ʔay</i>	<i>pan</i>
有生	16% (21)	27% (44)
無生	2% (1)	76% (35)

7 まとめ

- (a) イロカノ語の*ʔay*は話者領域への移動を表す具体性の高い直示動詞であり、*pan*は語彙的には直示性を持たない全般的な移動を表す動詞である。そのため、一般に COME/GO 類に想定される意味的対立を成さない。
- (b) *ʔay*と*pan*は範列的な関係にあり、そのため*pan*は語用論的に直示的な含意が生じる。
- (c) *ay*と*pan*は空間的経路を厳密には表現せず、一般の経路動詞とは区別されるべきである。
- (d) イロカノ語のデータは、意味論／語用論の区別と、空間的直示表現が根本的には機能的な概念により定義されるべきという立場を支持する。
- (e) イロカノ語の*ʔay*は、典型的に人間（有生物）が移動者である時に使用される。このような特徴は、*pan*にはみられない。

略号

AV-行為者態, C-中核項, CV-移動物態, EX-排他, EXST-存在, GEN-属格, IMPF-未完了相, LIG-リガチャー, LV-場所態, OBL-斜格, P-固有名詞, PFV-完了, PL-複数, SG-単数, 1-一人称, 3-三人称, <>-接中辞, “=”-接語化

参考文献

Enfield, N. J. 2003. Demonstratives in space and interaction: Data from Lao speakers and implications for semantic analysis. *Language*: 79, 82–117./ Fillmore, C. J. 1997[1971]. *Santa Cruz lectures on Deixis*. Stanford, CA: CSLI Publications./ Gathercole, V. C. 1977. A study of comings and goings of the speakers of four languages: Spanish, Japanese, English, and Turkish. *Kansas Working Papers in Linguistics*, 2, 61–94./ Goddard, Cliff. 1997. The semantics of coming and going. *Pragmatics*: 147–162./ Goffman, Erving. 1963. *Behavior in public places*. New York: Free Press./ Grice, H. Paul. 1975. Logic and conversation. *Syntax and semantics, vol. 3: Speech acts*, ed. by P. Cole and J. L. Morgan, 41–58. New York: Seminar Press./ Levinson, Stephen C. 2000. *Presumptive meanings: The theory of generalized conversational implicature*. Cambridge, MA and London: MIT Press./ Matsumoto, Yo et al. (to appear) The interactional nature of deictic verbs in English, Japanese, and Thai: Why Deixis must be treated separately from Path./ Talmy, L. 2000. *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.